

近松の里づくり事業推進会議（福井県鯖江市）

近松の恋物語が 360 年の時を経て 鯖江の地によみがえる

近松の里づくり事業推進会議

副会長

たかしま のぶよし
高島 信義



1. 鯖江市の概要

鯖江市は、福井県の北部のほぼ中央に位置し、北は福井市、南は越前市に隣接した南北 8.4 km、東西 18.6 km、面積は 84.59 km²、人口は 69,193 人（平成 28 年 10 月 1 日現在）の都市です。両市とは、幹線となる鉄道、道路により連結しているという立地条件にも恵まれ、早い段階で都市のインフラや公共施設の整備が進み、住みやすく、働きやすい環境の下で、市制施行以来、県内では唯一、人口が増え続けています。

本市の産業は、100 年余の歴史を持ち、全国シェア 9 割以上を誇る眼鏡産業、糸づくりから織物、染色、縫製まで、川上から川下に至るすべての機能が集積する合繊織物を主体とする繊維産業、そして全国 23 箇所の漆器産地の中で最古の約 1500 年の歴史を誇るとともに、業務用漆器においても 8 割のシェアをもつ河和田の漆器産業と、三つの大きな地場産業が基幹産業となっている「ものづくりのまち」といえます。



眼鏡、繊維、漆器のものづくり産業

近年は、機械・電子部品工業や IT 産業など新たな産業が台頭してきていることから、4 番目の地場産業への成長を期待しています。

さらに、電子行政の新たな手法として、行政機関がウェブを活用して積極的にデータの提供や収集を行うことを通じて、行政への住民参加や官民協働の公共サービスの提供を可能とし、促進して行おうとする

「オープンガバメント」の実現に向け、平成 23 年度から、ホームページで市が所有する情報を多方面で利用できる XML、RDF 形式で積極的に公開する“データシティ鯖江”を推進し、IT のまち鯖江を全国に発信しています。

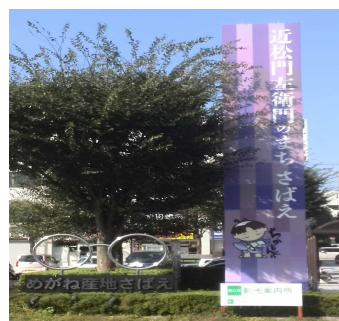
2. 活動開始の背景・経緯

近松門左衛門は、多感で人間形成に重要な幼少期を鯖江で過ごしています。義理や人情に悩む日本人らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたといえ、鯖江は、近松文学の原点になったまちです。

近松の里づくり事業推進会議は、元禄三大文豪のひとりである近松門左衛門を核とした地域文化の掘り起こしとして「近松の里たちまち創生事業」を立ち上げ、地域に眠る資源の可能性を最大限に開花させることにより地域活性化の活動をけん引することを目的としています。

平成 9 年に、前身である「近松の里づくり事業推進委員会」が設立され、平成 14 年に、組織の強化を図り「近松の里づくり事業推進会議」に改称されました。

鯖江市も JR 鯖江駅前に「近松門左衛門のまちさばえ」の看板を設置するとともに、庁内に各課横断的に「近松のまちづくり推進チーム」を結成し、全市的に近松のまちづくりを推進しています。



JR 鯖江駅前の看板（東面）

3. まちづくり交付金事業の活用

平成 19 年度から 5 年間をかけ、まちづくり交付金を活用して「近松の里」の整備を実施しました。

平成 24 年には、整備された近松のスポットをまわる「近松の里たちまちスタンプラリー パワースポット + KOIBANA めぐり」を開始。12 箇所にスタンプボックスを、そのうち 5 箇所には、近松作品を紙芝居風に見ることができる物語ボックスを設置しました。

また、女性に支持されるまちづくりを目指して、様々な花をスポット毎に植栽して花言葉を掲載し、四季折々に楽しむことができる「恋花が咲き乱れる近松の里」に整備しました。



近松が生きていた時代を復元した蓮池

4. 北陸新幹線の開業、舞鶴若狭自動車道の全線開通をチャンスに

近松生誕 360 年の記念事業として、平成 25 年に創設した「さばえ近松文学賞～恋話 (KOIBANA)～」近松の作品には、恋愛物が多いことから、原稿用紙 10 枚以内で恋にまつわる短編小説を募集しており、毎年、全国から 400 を超える作品が集まっています。

応募に関して、作品の中に、必ず、鯖江に関すること（歴史・文化・産業など）を最低一つ入れることが条件になっています。北陸新幹線の金沢までの開業や舞鶴若狭自動車道の全線開通を鯖江に来てもらうチャンス

と捉えています。鯖江に来て作品を制作する方には、ボランティアガイドによる解説付き近松の里めぐりや、鯖江人形浄瑠璃「近松座」による文楽の鑑賞、文楽人形体験、メガネのストラップづくり・越前漆器絵付け体験・伝統織物「石田縞」の手織り体験など地場産業の体験を無料で幹旋しています。

毎年、多くの方が、鯖江を訪れ、鯖江のことを知って作品を制作しています。



さばえ近松文学賞応募者による絵付け体験

5. 様々な可能性を秘めた「二葉葵」

立待地区には、江戸時代、「吉江藩」が置かれていました。藩主は、徳川家康のひ孫である松平昌親で家紋は、徳川家と同じ「三つ葉葵」です。近松の父も、吉江藩の藩士であったことから、親子共々吉江で生活していました。

しかし、「三つ葉葵」という植物は、存在せず、山野草の「二葉葵」が原形になっています。

この「二葉葵」は、京都三大祭の一つである「葵祭」で使用されますが、9年前に京都の「二葉葵」が環境の変化により激減し「葵祭」の開催が危ぶまれているということを知った当地区の住民が、「二葉葵」の生産を決意。上賀茂神社に出向き、10株の「二葉葵」を持ち帰りました。その後、大切に育てて株分けを繰り返し、数年前から、「葵祭」に合わせて上賀茂神社へ奉納。今年の「葵祭」で使用する「二葉葵」の半数以上は鯖江産で、9400本を奉納しました。

また、昨年からは京都の染色作家と「二葉葵」の染物の試作に取り組み、その結果、上賀茂神社の田中宮司が染物の綺麗な緑色に対して、「葵の想い」と命名されました。現在、地元企業とともに、本市の伝統織物で市指定文化財に指定されている

「石田縞」の技術を活用して、地域の特徴を活かした葵染めの新商品、近松の里の新しいお土産物の開発に取り組んでいます。



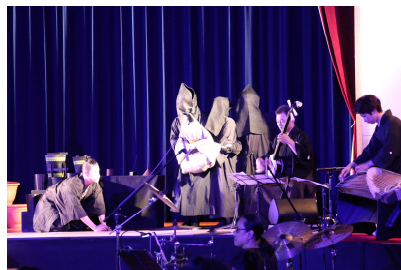
京都の染色作家とともに「葵染め」を奉納

6. 継続は文化なり

歴史資産を活かしたまちづくりは、短期間で成果が出るものではありません。毎年、地域住民の理解を得て継続的にこつこつと事業を実施し、地域全体の機運を盛り上げながら、住民一丸となって取り組んでいくことが大切です。

近松は、世界に誇る浄瑠璃作者であることから、近松のまちづくりのソフト事業の核は文楽と考えています。平成17年には、市民有志により、鯖江人形浄瑠璃「近松座」が、また、平成24年には、長年の住民の悲願であった地元立待小学校に「たちまち子ども文楽」が設立されました。

また、平成25年からは、文化庁の支援をいただきながら、新しい感覚で、日本古来の伝統芸能文楽に触れることができる啓発イベントを毎年実施しています。



新しい感覚で文楽を!!「とりっく BUNRAKU」

7. 課題と展望

「近松の里」のハード整備事業が完了した現在、効果的な情報発信を行い、整備されたスポットに、いかに多くの来訪者を呼び込み、まちづ

くり、地域活性化につなげていけるかが大きな課題です。

地域住民が、ブランド力の高い、地域の歴史的資産である近松を理解して愛着を持ち、知恵を出し合い、工夫を凝らし、汗を流してまちづくりに取り組むことが肝要です。

来年は、「たちまち近松まつり」は20回目、「立待観月の夕べ」は15回目、「さばえ近松文学賞～恋話(KOIBANA)～」は5回目の募集、「たちまち子ども文楽」は設立5年目、また、近松忌記念俳句大会は第40回開催の記念の年を迎えます。

来年の記念事業については、現在、「全国子ども文楽サミット」の開催や鯖江人形浄瑠璃「近松座」と「文楽座」人形遣い、桐竹紋壽師匠(きりたけもんじゅししょう)による師弟公演を計画しています。これは、桐竹氏の指導で、「近松座」が2年間をかけて近松演目『傾城恋飛脚(けいせいこいびきやく)』を習得していることから、師弟共演による『傾城恋飛脚』の上演を実現するものです。また、新しい感覚で文楽に触れることができる文楽啓発事業も継続して実施していきます。



いぶき野小学校と立待小学校との子ども文楽交流

また、「さばえ近松文学賞～恋話(KOIBANA)～」についても、5年間の入賞作品を1冊にまとめたものの発刊を検討しています。

近松作品や文楽は「敷居が高い」との先入観を持つ方が多いと思われるかもしれませんが、これらのイベントをうまくミックスして相乗効果を生み出し、これからも「近松のまちさばえ」の全国発信に取り組んでまいります。